

岡山のとしょかん

岡山県図書館協会報
(第127号)

真庭市立中央図書館のご紹介

平成30年7月3日、真庭市勝山町並み保存地区の中に、真庭市立中央図書館が開館しました。

面積は3,106.17㎡、3階建ての建物は、築37年の旧勝山町役場が再生建築により生まれ変わりました。新築に比べ、既存の建物の柱や梁を利用しているので大幅にコストが軽減されています。内装には真庭市産の木材を多用し、開架スペースの空調は再生可能エネルギーである木質ペレットのボイラーを使用しています。また、LED照明や空調機一括制御を導入することにより、CO2の年間排出量を削減している、環境に配慮した建物です。

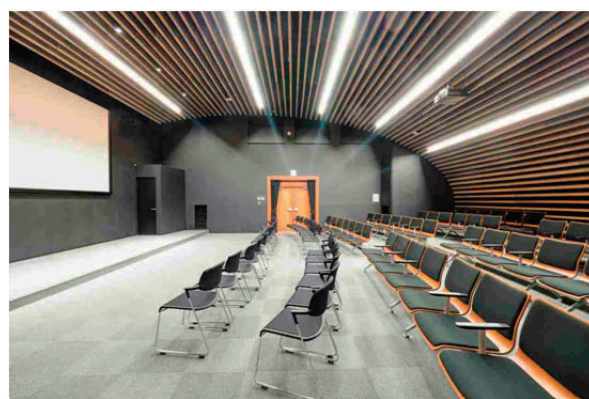


[1階開架スペース]

■館内施設について

1階は一般図書、新聞、雑誌、郷土資料室、市民活動室、対面朗読室と飲食スペースがあり、蓋付き容器の飲み物であれば開架スペースで飲むことができます。2階は児童図書コーナー、キッズスペース、お話の部屋、そして屋外で読書が楽しめるテラスがあります。クッションマットを敷いたキッズスペースで

は、靴を脱いで親子でリラックスした状態で過ごすことができます。3階は学習室、会議室と映像シアターがあり、200インチスクリーンで映画等が楽しめます。映像シアターと会議室は有料ですが、個人の方で利用することもできます。



[映像シアター]

■市民参加型の図書館

真庭市立中央図書館のコンセプトは「学びあい、人生を応援しあう、【市民参加型】の図書館」です。開館にあたり、ワークショップを通じて多くの方からご提案をいただき、開館後は「中央図書館サポーターズ」というサポート団体のご協力を受けながら事業を行っています。

また、フリーWi-Fi、学習室、映像シアターなどの施設利用を通じて、これまで図書館に足を運ぶ機会が少なかった方々の利用を促すとともに各世代のニーズにマッチした学習機会や各種サービス、支援等を提供できるよう心掛けて運営しています。

どうぞ真庭にお越しの際は、お気軽にお立ち寄りください。明るく、居心地の良いスペースを準備してお待ちしております。

(真庭市立中央図書館 池田政師)

**図書館川柳コンテスト開催
～狙え!としょせんグランプリ～**

「あの本もこの本も好きまだ死ねぬ」

こちらは昨年、笠岡市立図書館40周年を記念して開催された図書館川柳コンテスト一般部門の市長賞の作品です。こんなにも熱い本への情熱をお持ちの方がいることをうれしく思うと共に、その情熱に答えられる図書館、そして図書館司書でありたいと改めて司書魂を刺激される作品です。小学生・中学生部門の市長賞の作品は「図書館は未来へはめるワンピース」です。本離れ、読書離れが言われる中、図書館が未来へのワンピースになっているとは、なんとも希望あふれる作品ではないですか。

ちなみに当図書館の司書一番人気の作品は、小学生・中学生部門の図書館賞で「本よむよよむよむよむよよむよむよ」です。一度で読めた方は大変優秀です。一見、簡単に考えたように見えるこの作品、受賞者に聞くと本を読んでもらえるように一生懸命考えてくれたそうです。その証拠に応募用紙には何度も消して書き直してくれた跡が残っています。

今回の図書館川柳コンテストは、当初の案よりもかなり大規模なものになりました。市内の小中学校に応募用紙を配布し、館内だけでなく公民館など市内施設にもポスターの掲示をお願いしました。ところが、応募期間が約3ヶ月と長かったためか、出だしはあまりよいとは言えず、お声かけをしても思ったより川柳へのハードルの高さを感じている方が多くおられました。

しかし、応募期間残り1ヶ月となった辺りから続々と応募が増え、学校からもクラスや学年単位での応募がありました。その結果は、小学生・中学生部門419名871作品、一般部門87名249作品となりました。

業務と並行しての作品のデータ入力には膨

大な時間がかかりましたが、入力中にも感心するもの・笑えるものと、魅力あふれる作品ばかりで、うれしい悲鳴となりました。

毎年の開催は難しいですが、こんなにもたくさんの方の図書館や本への「思い」に出会えるのなら、第2回もいつの日にかと思える企画でした。

**図書館川柳コンテスト受賞作品
(小学生・中学生部門)**

✿市長賞✿

「図書館は未来へはめるワンピース」

✿教育長賞✿

「図書館で走っていいのはメロスだけ」

「たんけんだ本のジャングル楽しいな」

✿図書館賞✿

「いるんだよわたしの中に本の虫」

「手にとって読めばかいけつぼくのなぞ」

「楽しみだかぶとがに号次はいつ」

「本よむよよむよむよむよよむよむよ」

「恋人と図書館デートどうですか」

**図書館川柳コンテスト受賞作品
(一般部門)**

✿市長賞✿

「あの本もこの本も好きまだ死ねぬ」

✿教育長賞✿

「車イス移動図書館待ち侘びる」

「うとうとうと風がめくっている詩集」

✿図書館賞✿

「図書館で出会って今は子と通う」

「背表紙の”F”が私のお気に入り」

「あの頃の思い出うかぶぐりとぐら」

「借りすぎた重さに弾む期待感」

「乱読が精読になる定年後」

(笠岡市立図書館 長谷川智恵)

**金光歴史民俗資料館
— 図書館のお宝紹介 (第4回) —**

浅口市立金光さつき図書館と共に金光公民館に併設されている金光歴史民俗資料館は、市民の皆さんから寄贈された様々な資料を所蔵しています。



[浅野五牛]

その中で今回紹介する資料は、浅口市金光町出身の書家浅野五牛あきのごぎゅうに関する資料群です。

浅野五牛(1915～1999)は、現在の浅口市金光町で生まれました。本名貞雄、五牛は号です。昭和24年(1949)の第2回書道芸術院展覧会で内閣総理大臣賞を受賞したことにより、書道家としての人生を歩むことを決意し、以後精力的に作品を発表し続けました。岡山県立鴨方高等学校や福岡教育大学で書道教育者として教鞭をとり、多くの子弟を育成しました。また、昭和37年(1962)には、「本当の書道とそのための書教育の探求」というテーマを掲げて「春秋会」を結成・主宰するなどして、その生涯を書道芸術の探究に捧げました。

当館は、平成28年(2016)にご遺族から寄贈いただいた掛軸・屏風・額等の作品や未表装・



[第1回企画展「書家浅野五牛」]



[第2回企画展「書家浅野五牛Ⅱ」]

未発表の諸作品、愛用の各種書道具、五牛が師事していた前衛書道家の上田桑鳩うえだそうきゅう(1899～1968)や同じく前衛書道家の桑原翠邦くわはらすいほう(1906～1995)、岡山県出身の河田一白かわたいつきゅう(1911～2000)など生前交友のあった芸術家の作品や書簡など約200点を収蔵しています。

五牛作品は、「炎の書家」と語られるにふさわしい気迫に満ちあふれています。時には艶光し時には柔らかな濃淡を持つ墨をもって記された言葉は、いずれもが書に対する真摯な思いが込められています。

様々な種類の墨を巧みに使い分け、変幻自在な表情を持つ作品群は、それら一作品一作品が、書を究めんとする人生の側面であり、見る者の心を打つことでしょう。



[第3回企画展「書家浅野五牛Ⅲ」]

当館では、折につけ企画展を開催し、郷土が生んだ偉人を広く市民の皆さんに紹介する機会を設けています。

ぜひ金光歴史民俗資料館にお越しいただき、浅野五牛の世界を感じていただきたいと思います。

(浅口市立金光さつき図書館 館長 中嶋利恵)

西日本豪雨

真備図書館の被災状況

平成30年の7月豪雨で真備図書館周辺の箭田(やた)・有井(ありい)地区は、100年に一度の降雨により、倉敷市のハザードマップの想定と同じ5mを超える浸水を記録した。

真備図書館内も3m以上浸水し、開架室・事務室・書庫にあった図書・雑誌・視聴覚資料約127,000点と真備図書館の利用者に渡す予約資料・他館に送る予約資料・返却の資料など約1,200点が水没した。



[7月9日時点]

泥水が洗濯機の水の流れのように館内をまわったようで、玄関前にあった館内案内図が一番奥で見つかり、天井に書架サインが貼りつき、机や書架も倒れて壊れていた。本を踏まないと歩けない状況で、泥だらけのそれらの本を全部捨てないといけないという現実に、言葉を失って呆然と立ち尽くした。



[7月25日時点]

「うちの家は、2階建てだったから、1階が浸かっても2階で救助を待たれたけど、前の家は平屋だから屋根裏から、助けを求める声があったよ。」と、7月10日に倉敷中央図書館のカウンターで真備図書館の利用者から話を聞いた。岡山県のホームページによると、真備町で亡くなった方のうち65歳以上の方が45人で、そのう

ち9割近い方が自宅で亡くなっている。真備図書館のカウンター横に、ハザードマップを掲示すると共に、2015年の常総市の鬼怒川の氾濫と同じことが小田川で起こるかもしれないと危惧していたが、このような結果となり残念でならない。

7月17日から真備図書館の片付けを始めた。真備図書館とマービーふれあいセンターの駐車場は被災ごみの搬入場所として使用され、8時過ぎには、被災した自宅のごみを持って来る車が列になっていた。私たち倉敷市の図書館職員は総出で7時半に集合し、片付けを始め、35度の猛暑の中、泥水に浸かった床に散乱する本や壊れてしまっている書架、備品を運び出した。県立図書館の方、倉敷市生涯学習部の職員の協力もあり、7月末には、開架部分の撤去を終了した。書庫の集密書架は当初、レールに本が落ちて動かなかったが、8月には書庫内の本と書架の撤去も完了した。幸いフォークリフトや、高圧洗浄機を友人から借りることができたので、早く片付けることができたが、手作業だけではもっと時間がかかったと思う。

真備地区の方が借りられていて、水害にあった市内の図書館の資料約2,800点については被災届が提出された。

現在は、壁や天井にカビが生え、断熱材が落ち、窓ガラスも何か所も割れているが、図書館の中も外回り



[10月18日時点]

もスッキリ片付いている。

1月からは、真備地区の仮設住宅や、公民館への移動図書館も運行を始めた。全国からの様々なご支援に感謝しつつ、少しずつ再開・復興に向けて、一步一步進んでいる。

(倉敷市立真備図書館 館長 藤井広美)

岡山史料ネットの西日本豪雨後の取組み

阪神淡路大震災をきっかけに歴史資料ネットワークが結成され、災害時における歴史資料の救出・保全活動が始まりました。その後も各地で発生する災害に対応して、歴史資料の救出・保全活動が行われるなか、災害発生前に何かできることをという考えのもと、2005年に岡山史料ネットは発足しました。

岡山史料ネットにとって、西日本豪雨後の取組みが初の本格的な災害対応となりました。今回、被災家屋の片付け作業は、思い出の詰まった写真すら分別する余裕がない程の酷暑のなか行われ、私たちが現地ですぐさま活動する余地は皆無でした。それでも7月下旬以降依頼が入り、合わせて6つの資料群、約1,000点(その中心は近世～近代の古文書)を救出しました。10月からは救出した資料の整理修復作業を始めています。現在、作業の中心は水損資料の洗浄・乾燥です。

被災地での活動を経験し、災害時に歴史資料の滅失を防ぐためには、①人②物③資金④場所⑤情報が不可欠であることを痛感しました。

現地で活動する①がいなければ救出ができないことは明白です。しかし同様に保管・作業をするための④が確保できなければ後手を踏むこととなります。今回は事務局のある岡山大学で一部屋確保できたこと、県立記録資料館など県施設の冷凍庫を使用できたことが幸いしました。

また②・③については、歴史資料ネットワークを通じて多くの募金をお寄せいただき、それをもとに必要物資を購入することができました。他県の事例によると、公立文書館や博物館で資料保全活動を行うことがあっても、外部から募金を受け取ることが難しい場合があるようです。行政に依存しない組織の重要性が窺えます。

そして何よりも重要なのが⑤です。地震など他の災害時に比べて、水害発生時にはすぐに様々なものが廃棄されてしまいます。それでも

今回のような過酷な環境で片付け作業が行われた場合、史料ネットがすぐに現地入りすることは不可能です。したがって、現地入りできないなかで情報収集を行うこととなります。そのため、自治体の文化財担当者などから寄せられる被災資料に関する情報が、非常に大きな意味を持ちます。

図書館にも被災資料についての情報提供や相談がありましたでしょうか。今後は図書館を含めて県内の様々な施設・自治体と史料ネットとのさらなる情報共有を実現するような仕組みを作ることが課題となっています。

(岡山史料ネット事務局長 上村和史)



[救出した資料の一部]



[整理修復作業の様子]

県内公共図書館の被災状況 (事務局から)

真備図書館の他に、高梁市図書館の移動図書館車が修理工場で被災し、図書館車と積載図書約900冊を失った。総社市昭和公民館では、浸水により図書館業務用パソコンが使用不可能となった。現在は、2館とも通常どおり運営している。また、多くの図書館は7月7日、8日に臨時休館となった。

今後、当協会としてどのように携わっていくことができるか被災館と共に考えていきたい。

**平成30年度岡山県図書館協会研修
参加助成事業報告書**

研修名：第104回全国図書館大会東京大会
期 日：10月19日（金）～10月20日（土）
会 場：国立オリンピック記念青少年総合センター

年に一度は全国的な研修に参加して、情勢を学びたい。図書館大会は理事長の基調報告もありうってつけの大会だと思う。大会テーマは「市民とともに成長する図書館－図書館専門職のカー」。

毎年参加している「図書館の自由」の分科会では、資料の切り抜き被害やNHK「プロフェッショナル 仕事の流儀」で中学校図書館で生徒名が書かれたカードを映していたこと等が取り上げられた。切り抜き被害は昔からあることだが、警察にも届け公表するようになってきたので、増えた感が強いのでは？とのこと。また、戸籍とは違う性での登録希望について、確実に連絡が取れるのであれば、本人のプラスになるようにするのが望ましいのでは？などの西河内委員長の基調報告があった。

続いて『「図書館の自由に関する宣言 1979年改訂」解説』を、主文や副文には手を加えないで、増補していきたいこと。「デジタルネットワーク環境における図書館利用のプライバシー保護ガイドライン（案）について」も出したという提案があった。

午後からは「公共図書館の使命・役割の原点を見つめ直す」の分科会に参加。山口源治郎氏（東京学芸大学教授）の基調講演で、現在の公共図書館は1970年初頭にできあがったが、この数十年に何を積み重ねてきたかとの投げかけがあった。「知る権利の保障」などの思想ができてきたが、現在は人の問題が大きく、非正規職員がダメというわけではないが、非正規職員が増えていくと、彼らを支えていくのも難しくなってくるとのことだった。

他に、埼玉県飯能市と滋賀県野洲市立図書館の実践報告があった。

（岡山市立京山中学校 池田桂子）

研修名：平成30年度全国公共図書館研究集会
（サービス部門 総合・経営部門）
期 日：11月29日（木）～11月30日（金）
会 場：石川県立図書館

総社市図書館では、児童サービスとともに、高齢者サービスに力を入れています。出前サービスとして、平成21年から市内のグループホームや地域の高齢者サロンに職員が出向き、紙芝居やエプロンシアター、パネルシアター等を実演したり、図書の団体貸出を行ったりしています。今回の全国公共図書館研究集会の研究主題が、「超高齢社会の中で図書館の果たすべき役割とは」というもので、基調講演や事例発表の内容が、これからの総社市図書館のサービス向上に大変役立つものと感じ、参加しました。

研究集会の中で特に心に残ったのは、呑海沙織氏の基調講演「超高齢社会と図書館」です。日本の高齢化率は世界1位であるが、それは反対に、世界に先駆けた取組みにチャレンジし、アピールするチャンスでもある、というものでした。そして、高齢者になった時に利用したい施設の上位には図書館があり、人生100年時代に公共図書館に求められるのは、高齢者の学習拠点であり、生きがい創出の場である、とのことでした。

高齢社会の中での図書館のあり方については、日ごろから模索を続けていましたが、この研究集会に参加したことによって、改めていろいろ考えさせられました。事例発表で紹介された「親子で認知症を学ぶ会」や「認知症にやさしい本棚」等、自館に取り入れられることもたくさん発見することができました。今、できることから始めて、市内の他部署との連携も含め、前向きに取り組んでいきたいと思えます。

基調講演で言われたように、超高齢社会における図書館の役割を果たすためには、「生涯にわたる学び」をささえ、固定観念を捨てて、他の図書館や他部署、他領域、利用者との協働を目指さなければならないと強く感じました。

各図書館が実施していること、計画していること等、さまざまな情報を各館が発信することによって、お互いに刺激を受け、新たな可能性が広がるのではないのでしょうか。参考になることや協力しあえることも多いので、図書館の多様化が求められている今こそ、協働を目指していきたいと思います。

(総社市図書館 松永咲裕美)

研修名：平成30年度中国・四国地区図書館地区別研修
期 日：12月11日(火)～12月14日(金)
会 場：JMSアステールプラザ 4階 大会議室

今回、地区別研修全4日間のうち3日間の日程に参加しました。図書館に関するさまざまな講義や演習があったのですが、演習「図書館における危機管理」の中で学んだ「怒った利用者」への対処法について3つのポイントをご紹介します。

①落ち着いて対応する

怒りはエスカレートしていくので、「不満を言う」の段階で押さえなければならない。対応する際は深呼吸し、心の中で「3・2・1」とカウントダウンする。(人はショックを受けると呼吸が止まることがあるため)

②敬意を払って利用者に対応する

利用者の望みは「わかってほしい」「受け入れて欲しい」ということなので、傾聴に徹する。論破しても解決にならない。批判は個人的なものを受け取らず、たまたま自分が批判を受けた、運が悪かったと思うこと。

③同僚や館長と一緒に対応する

複数名で対応することで、場の仕切り直しを行う。館長が対応することは、自尊心を満足さ

せて怒りを和らげることができる。時間がかかる場合には、利用者の氏名・連絡先などを聞き出し、後で連絡する旨を伝える。

図書館は、不特定多数の人々に対して「快適」「安全」「安心」な施設でなければなりません。この研修で学んだことを、誰もが「行きたい」と思うことができる図書館づくりに活かしていきたいと思います。

(笠岡市立図書館 原田恭江)

県図協セミナー(第2回)に参加して

「図書館運営のあり方」

期日：平成30年12月19日(水)

講師：田井 郁久雄 氏

「全国的に貸出減少が進む中で、岡山の図書館員に今、何が求められているか」と題してお話していただきました。

全国的に貸出、資料費、正規職員数の減少がみられる一方で民営化による指定管理の図書館は増加傾向にあります。岡山県の図書館の状況は、全国と比べて人口一人当たり年間貸出点数は多く、図書館経費や職員数が少ないのが特徴です。図書館に対して住民の声が強く反映された時期を経て現在まで発展してきました。

「図書館職員は、資料との出会い・発見の場をつくる工夫をしていかなければいけない。書架の横に本を並べて出すだけの簡易的なコーナーでも、利用者にとってはそれが資料との出会いの場になる、たとえ数週間の展示でも効果的である。」このお言葉がとても印象的でした。何気なく手に取れる展示や案内表示をすることで資料提供の場作りをすることが出来ます。忙しい日常からでも取り組むことが



[県図協セミナー(第2回)の様子]

出来そうです。

「利用者と職員が接する場としてのカウンター業務」は対話の大切さを常に意識しなければならないところです。にぎわいをもたらす場、新しい設備や機器の設置などに目を向けてしまいがちになるなかで、利用者の真のニーズに応じていくために「資料の収集、整理、保存、提供」のあたりまえの役割と「日常的なサービス」の充実を常に意識する必要があります。

変化し続ける利用者や図書館を取り巻く環境に対応しつつ、本来の図書館の果たす役割を見失わないように日々の業務に取り組んでいきたいと思いました。

(就実大学・就実短期大学図書館

渡部真子、神原亜紀子)

県図協セミナー（第3回）に参加して

「ビブリオバトルをやってみよう！」

期日：平成31年1月26日（土）

講師：谷口 忠大 氏

(立命館大学情報理工学部教授、ビブリオバトル発案者)

「百聞は一見にしかず」ということわざが、まさにぴったりの講座でした。

「ビブリオバトル」— 数年前から名前だけは知っていたものの、見たことも、ましてや、体験したこともないことの一つでした。ずっと気になっていた「ビブリオバトル」について、発案者の方から直接お話が伺える、しかも、地元・笠岡で・・・。「なんという幸運なのでしょうか！！」・・・ということで、同僚二人を誘って、セミナーに参加することにしました。

事前に配布されていたチラシには、「誰でもできる」とか「好きな本が一冊あれば大丈夫」とか、いとも簡単なことであるかのごとく、魅力的なお誘いの言葉が書いてありました。しかし、その言葉を真に受けて、無防備で参加してしまった場合、知らない人の前で恥をかくことになるかもしれないという不安がありました。その

ときの私は、「うまく話さないといけない・・・」という思いでいっぱい、ビブリオバトルのポイントを完全に誤解していたのです。

しかし、その不安は、講師の谷口先生の開口一番の「(ビブリオバトルの) 敷居、低いよ！」という言葉で、驚きに変わりました。

ビブリオバトルは、最小限のルール4ヶ条を守ることで「おもしろさ」を生み出せる仕組みになっています。ゲームの持つ力を活用しているという点でも、とりあえずやってみなければわからないおもしろさがあると思いました。

講座は、前半が谷口先生のご



【県図協セミナー（第3回）の様子】

講話、後半がビブリオバトルの実践でした。「人を通して本を知る、本を通して人を知る」というキャッチフレーズのとおり、ビブリオバトルに参加してみて、とても有意義な時間が過ごせました。他の二人の同僚も、「ビブリオバトルは、気楽に取り組めるということがわかったので、ぜひ授業でもやってみよう」という感想でした。

今回の講座に参加しなければ、同じグループで、本を紹介し合った皆さんと出会うことも、本について語ることもなかったでしょう。

ビブリオバトルによって、素敵な「一期一会」をいただきました。ありがとうございました。

(笠岡市立笠岡西中学校 池本文子)

各セミナー、教養講座の資料が必要な方は事務局まで御連絡ください。(提供できない場合もございます。)

平成31年3月1日発行

〒700-0823 岡山市北区丸の内2-6-30

岡山県立図書館 図書館振興課内

岡山県図書館協会 会長 狩屋 幸司

TEL : 086-224-1286